

侯揚方著

『中国人口史』第六卷

〈一九一〇—一九五三年〉

佐藤 仁史・戸部 健

中国における歴史人文地理の分野のプロジェクト研究は復旦大学中国歴史地理研究中心（旧中国歴史地理研究所）の独壇場であり、例えば『中国歴史地図集』をはじめとする成果が歴史人文地理の範疇に限定されない多様な分野の研究に裨益してきたことは周知の事実である。近年の成果には『中国移民史』全六巻があり、通時的な動態に関する見取り図を示している。『中国移民史』の姉妹編といえるのが『中国人口史』シリーズであり、前シリーズと同様に葛劍雄氏を主編とし、それぞれの巻は、各時期の人口史研究において独自の見解を提出してきた論者によって担当されている。その中で、清末から中華人民共和国建国直後までの時期を対象とする本書は単に近代史部分を担当したというのにとどまらない意義を有している。すなわち、本書

は、性質の異なる人口統計資料が錯綜する状況に対して綿密な検討を加えた上で、人口学の方法論を本格的に導入した研究であり、それが示す内容や成果は歴史人口学の領域にとどまらず、関連分野においても積極的に検討されるべき問題提起を含んでいるのである。これが本書を取り上げて論評する所以である。

二

本書の構成は次の通りである。

- 第一章 緒論
- 第二章 宣統人口普查
- 第三章 民国時期の人口統計資料来源
- 第四章 分地区の人口数字（上）
- 第五章 分地区の人口数字（下）
- 第六章 全国人口数字の来源和估計
- 第七章 人口的性別与年齡結構
- 第八章 人口的婚姻与生育
- 第九章 人口的死亡及死因
- 第一〇章 人口模型与人口估計
- 第十一章 人口の分布和遷移
- 第十二章 戸与家庭及其結構
- 第十三章 人口的職業、教育和生活水平

第一章 中国的人口転変

第一章では、中国近代人口史の主要な先行研究とその問題点、本書が採る方法と研究上の意義を述べる。何炳棣氏をはじめとする中国内外における従来の人口史研究が、「人口制度史」の範疇に属する研究であり、人口統計そのものに対する分析が十分ではなかったことを指摘する。その背景には、民国期の人口統計に対する不十分な態度、すなわち、統計の信憑性の低さからそれらの価値を一概に否定してしまうという態度があるという。そして、これを克服して当該時期の中国人口の動態を把握するために、人口学の方法に拠りつつ、国勢調査（普查）、人口サンプル調査（調査）、人口登記の三つのルートから得られた数値を中心に人口統計を詳細に検討するという手法を提示する。

第二章では、従来の人口史研究において一部の例外を除きほとんど分析の対象として俎上に載せられることのなかった宣統年間の人口調査を取り上げる。一九三〇年代にこの調査の結果を詳細に分析した王士達と陳長衡の成果を参照しつつ、調査の背景と過程、調査組織や方法といった制度面、各地域における概況、人口統計資料の由来を整理する。その上で、宣統年間の人口調査が現代的意味における初めての国勢調査であるとして高い評価を与える。

第三章は民国期の人口統計資料がいかにして作られたのかについて詳細に検討する。筆者は民国期の人口統計には現代的な方法に拠るものはないとし、民国期の正確な人口はつかむことができないと述べる。そのうえで、宣統年間の人口調査と一九五三年に行われた人口調査の結果を参照したり、当時の人口学者によつて行われた人口調査の結果などを利用したりすることによって、その趨勢はある程度把握できると主張する。

第四章と第五章は一九〇九年から一九五三年までに行われた官による人口統計の結果を検討することで、当該時期における中国各地域の人口動態を探る。これは人口の正確な状況を割り出すものではない。様々な資料と比較することで、これまで言われてきた諸説を再検討し、最も妥当な数字を検証するものである。また、明らかに誤りのある資料についてはその誤りの原因についても検討している。

第六章では民国期において人口に言及される際にしばしば使われた「四万万同胞」という言葉（同時に、人口政策に深い影響を与えた政治的ロジックでもある）が、当時よく引用された種類の人口統計に基づく憶測であることを指摘する。そして、第二章から第五章における人口統計資料の綿密な検討を踏まえ、主に性別比による人口統計の修正を通して、一九一〇年、一九三六年、一九四六年の人口が

それぞれ四・一億人、五・三億人、五・二億人であると算出する。

第七章の検討内容は中国人口の性別構造と年齢構成についてである。一九三六年以前の官による全国人口統計においては性別比が一二〇に近似もしくは超過していることが、女性人口登記の遺漏を反映したものであるとする。その際の根拠となるのが、一九二九年から一九三二年に行なわれた『中国土地利用』をはじめとする地域的なサンプル調査や一九五三年の国勢調査による数値の検証の結果である。これによれば当該時期における性別比は一一〇を超えることがなかったという。

第八章は婚姻と生育について述べている。ここで筆者は既婚人口率が非常に高く、出生率も高いにもかかわらず、生育率が低いという二〇世紀前半の中国における謎に対して検討を加えている。そこで筆者は中国において生育率が低い原因を、性習俗や栄養水準の低さ、諸外国に比べて低い性交頻度に求めている。

第九章は死亡率、死亡原因、平均余命について検討する。死亡率に関しては都市のほうが農村の死亡率よりも低かったとする。また、主要な死因は農村では天然痘やコレラであり、都市では肺結核であったという。このような違いが起る原因を筆者は都市における公共衛生の近代化にある

と主張する。

様々な人口統計に対する以上の綿密な分析を踏まえた上で、第一〇章では二〇世紀前半における中国人口の変化を、「安定人口モデル」を導入して推計する。「安定人口モデル」は、一九五九年に国連経済社会事務部が行なった中国人口の推計にも用いられ、その結果（一九一〇年四・四三億人、一九二〇年四・七六億人、一九三〇年四・九三億人、一九四〇年五・一二億人、一九五〇年五・五六億人）は強い影響力をもったが、利用した資料の信憑性の低さから前提条件からして実際に合致しないものであることを指摘する。

また、コールをはじめとする西洋の人口学者が「間接人口推計技術」(Indirect Techniques for Demographic Estimation)に基づいて算出した推計が抱える問題点を併せて明らかにする。その上で、筆者自身が処理したデータを「安定人口モデル」を運用して検討し、一五歳以下の人口比率と出生から五歳までの生存率の推計による人口増加率などを算出する。

第十一章は、人口分布と移住の問題を扱う。空間分布については胡煥庸が提唱した瓊瑣——騰衝線が示す構造が現在まで一貫しているとする。都市人口と鄉村人口は従来の調査における都市の定義の不統一により推定以外の方法がないと主張する。また、移住については東北地方への約一

〇〇〇万人に及ぶ移民が中国史上最大の移住であること、広東と福建から海外への移民がそれに次ぐことを示した上で、移民人口の約半数が同一県内におけるものであることに注意を喚起する。

第二章では家族と戸の規模やその類型について分析がなされている。官の人口統計には戸に関する項目が設けられていたものの、それぞれの統計において戸の定義は不統一であった。したがって、時系列による比較分析には困難が付きまとうが、戸の規模は一戸あたり五・〇から五・五人の間に収まるとする。戸や家族の規模は作物の種類や作付面積などと正の相関関係にあり、より富裕な階層ほど家庭の規模が大きくなるという。

第三章は職業類別、教育程度、生活水準について論じる。中でも注目すべきはカロリー、タンパク質、鉄分、カルシウム、リン、ビタミンの摂取量から中国人の栄養状態を検討している部分である。それによると、一九二〇、三〇年代において農民の生活は確かに苦しかったものの、生きていくのに必要な栄養とカロリーは摂取できていたという。第四章では全体のまとめとあわせて中国における「人口転換」(the demographic transition)の時期について論じる。「人口転換」とは高死亡率・高出生率の状態から低死亡率・低出生率の状態に転換することをいう人口学に

おける図式である。著者は当時の中国人の死亡率を高める要素(伝染病、戦争、天災)を検討し、それでも人口が増加した原因を、①近代西洋医学と公衆衛生の中国における発展、②災害時の救済体制の確立、③交通網の発達、に求めている。そして、中国における人口転換は少なくとも一九二〇年代から始まっていたとしている。

三

本書の最大の特徴は、筆者が自認するように、二〇世紀前半期を対象とした初めての本格的な歴史人口学の著作であるという点にある。本書で用いられている人口学の方法は、例えば、人口学の分野においては成熟した方法として広く用いられている「間接人口推計技術」やこれに基づいた「安定人口モデル」などが主要である。しかしながら、第一〇章において取り上げたように、国連経済社会事務部が「安定人口モデル」に拠って算出した中国人口の推計が現実と乖離したことの轍を踏まぬよう、機械的な適用にはきわめて慎重な態度を同時に示している。性質の異なる統計資料が錯綜する状況に対して綿密な検討を加えた上で、国勢調査(普查)、サンプル調査(調査)、人口登記という三つのルートから得られる数値のみを検討対象にするという原則を打ち立てている。このような原則は大規模な人口

調査が有する「一回性」「不可逆性」への着目と総括することができよう。すなわち、全国レベルにおける人口調査は如何に厳密に実行しても誤差を生じるのは免れ得ず、誤差の修正が必要となる。清末以来の調査にも女性や子供の人口の遺漏や調査の信憑性の問題が存在するものの、「一回性」という観点に立てば貴重なデータであり、単に数値の信憑性の低さからすべてを否定してしまう従来の研究のあり方を克服せんとするものである。

様々な人口統計の再評価と「間接人口推計技術」とは表裏の關係をなす。国勢調査や人口登記がその性格から中央政府の主管部門のみがなし得るのに対し、様々な「民間団体」によるサンプル調査も存在しており、そのうちのいくつかは現代人口学の手続きに則った精度の高さを誇る。中でも、アーサー・ウルフによって低い評価を与えられていた『中国土地利用』に収録された喬啓明による調査結果がかかる精度を有するものであるとして筆者はこれを高く評価し、『中国土地利用』から得られた性別比や年齢構成になどの数値に基づいた「間接人口推計技術」による全国人口の推計に活用している。

本書がもともと「民国卷」として構想されていたのに対して、最終的に一九一〇年から一九五三年というスパンに落ち着いたことも本書の獨創性を端的に示すものである。

一九五三年の国勢調査が有用であることは容易に想像がつくものの、宣統年間の人口調査の有用性を掘り起こしたのは筆者の慧眼と言うべきである。これによって、一九二一年の調査における数値の誤謬が明らかになると同時に、それを補う一定の根拠が得られている。そのうえで、各時期の国勢調査や人口登記を前後に参照することで、より現実的な数値の算出に成功しているのである。

また、「人口転換」の時期に関する従来の定説を上述の方法によって再検討することの必要性を喚起する。従来では統計資料の信憑性の問題から民国期の「人口転換」の可能性については論じることができず、中国における人口転換は人民共和國期に起こったとされてきた。しかし、筆者は当該時期の人口統計を検討した結果、中国における「人口転換」は民国期に起こったという独自の主張を提出するに至っている。これは歴史人口学から見れば中国の近代化が民国期においてかなりの程度達成されていたことを示すもので、重要な問題提起であると思われる。この結果は、民国期における公共衛生行政と社会事業とが民衆に対してどれほど実効性を有したのかを考える上で非常に重要なものである。今後この結果を成り立たしめた民国期の社会情勢について歴史学の分野で更に詳細な検討が必要となってくるだろう。

四

人口統計の丁寧な検討と先行研究に対する強靱な批判精神に裏付けられて、本書は極めて明晰な論理構成で論述されている。しかしながら、その明晰さゆえに、なおも検討を要するいくつかの論点については結論を急ぎすぎている部分があることも事実である。一九一〇年から一九五三年を対象とするという本書の性格上やむを得ないことであるが、先ず挙げられるのが対象時期における変化を強調するあまり、先の時代との連続性について必ずしも十分な記述がなされていないことである。例えば、筆者は当該時期における中国人口の特徴を「典型的な高増加率、高死亡率で増加する型の人口に属する」(三三七頁)と述べ、公共衛生の普及や都市化の進展などに拠る死亡率の低下が人口増加を進めたとしている。ところが、玉牒を駆使した清代人口推移のマイクロ分析で著名な李中清による近年の研究に拠れば、前近代においてさえ人口は既に低出生率で推移していたという。この特徴はむしろ日本との近似性が指摘できると主張する論者もいる。前近代と近代との連続性に着目する場合、鍵になるのが出生率の問題であるように思われる。婚姻と生育をテーマとする第八章でも取り上げられているように、前近代から近代にかけての中国において初婚

年齢は極めて低いにもかかわらず、出生数は決して高い数値を示していたとは言えなかった。この背景には生育間隔が長く取られていたことがあった(三七九頁)。この点については、前近代の江浙地方においては墮胎や避妊などの産児制限が広く行われていたという李伯重氏の研究が極めて示唆的である。このような性習俗や禁忌は定量分析になじまない対象であるものの、理解を深化すべき問題であるように思われる。

社会制度と人口との関係についても、統計に直接反映されない要素に関する論述にやや物足りなさが残る。例えば、戸や家族の問題について論じた第二章では、家族の形態や規模、それらと社会階層との関係について論じられている。もちろんこれらが個人の死亡に大きく関わることに異議はない。しかしながら、例えば明清期の浙東の人口と季節変動を論じた上田信氏によれば、明末以降、農業技術の移転や商業化、宗族の慈善機能の発達などによって死亡率が季節変動の影響を受けにくくなったという⁽⁵⁾。もちろん、家計をともしにする家族のあり方が出生や死亡に与えた影響と比較すれば、宗族の慈善機能の効果は相対的に小さいものであったかもしれないが、やはり看過できない効果があったと思われるのである。このことは、様々な社会制度との関連で人口分析を深めることに對する注意を喚起するもの

であろう。

制度の理解という点については、中国の二〇世紀前半期における人口増加の原因や死亡率の低下の原因に対する理解にも気になる点がある。ここでは公共衛生の整備がその原因のひとつとしてあげられているが、そこで依拠している事例は主に北京第一模範衛生区のものである。筆者はこの模範衛生区の状態とそれ以前の北京の衛生状況を比較・検討することで、民国期における公共衛生の整備が民衆の死亡率の低下に影響を与えたと述べている。しかし、これはあくまでも模範区の結果であり、この結果が他の都市にも反映できるのかといえは、疑問が残る。実際に衛生行政は強力な権力をもった政府が警察力を組織的に使用して行うものであり、そのためには当然莫大な資金が必要である。国民政府に鄉村部を包括した広範な範囲を統括するための力がどれだけあったのかについては、歴史学の分野でもいまだ十分に解明されていない問題であり、様々な角度からの考察が必要とされている。また、クロイツァー氏の研究に拠れば、公共衛生行政を行うために必要な西洋医は中華人民共和国成立時においても一万人前後であったとされ、実際の医療行為は中医や占い師などによるところが大きかった。したがって、当時の死亡率低下の原因を公共衛生行政の確立とみる場合、行政の具体的な内容について更なる検

討が必要であろう。

五

以上で紹介したように、本書は全一四章、約六五〇頁からなる大著であり、内容も人口学が分析対象とする最も基礎的な諸項目、すなわち、性別差、年齢構成、婚姻、生育や死亡の状況、家族構成、人口分布や移住、職業や学歴、生活レベルなどについてバランスよく網羅されている。しかしながら、その豊富な内容を十分に紹介することができず、大雑把なものにとどまってしまった。これに加えて、とりわけ第一章「人口模型与人口估計」において駆使されている「間接人口推計技術」の基礎となる種種の公式に対する評者の理解不足により、本書の根幹に関わる部分に對しても十分に論評することができなかつたことをお詫びしたい。

本稿を終える前に、本書の成果を今後の中国近代史研究においてどのように消化していけるかについて言及したい。先ず連想されるのが歴史人口学に直接的に関わる領域における展望である。本書では全国的な人口動態のみならず、各省における動態も比較的詳細に検討されている。当然のことながら東北地方および台湾の人口動態に言及されているものの、著者が利用しえた史料に限度があつたため、他

の地域に比べて分析が十分でないように思われる。周知の通り、これらの地域については植民地時代の膨大な量にのぼる日本語史料が存在しており、かかる史料によってどのような人口動態の特質がみえてくるのかを、日本近世史・近代史における歴史人口学の成果と比較しつつ検討する必要があるだろう。また、第一章から第三章において歴史人口学に拠って独自の切り口から検討されている、移住や家族構造、職業、教育程度、生活レベルなどのテーマに関する成果も、社会史や教育史、農業経済史などの領域に対する寄与は少なくないものであると思われる。かかる成果がこれらの領域における活発な議論の展開を促し、それぞれの領域に対する理解がより一層深化することを期待したい。

註

- (1) 葛劍雄編、葛劍雄・吳松弟・曹樹基著『中国移民史』全六卷、福州、福州人民出版社、一九九七年。内訳は、第一卷〈導論、大事年表〉、第二卷〈先秦至魏晉南北朝時期〉、第三卷〈隋唐五代時期〉、第四卷〈遼宋金元時期〉、第五卷〈明時期〉、第六卷〈清民国時期〉、である。
- (2) 葛劍雄編『中国人口史』全六卷、上海、復旦大学出版社、のそれぞれの巻における執筆者と発行年は次の通

りである。第一卷〈導論、先秦至南北朝時期〉(葛劍雄著、二〇〇三年)、第二卷〈隋唐五代時期〉(凍国棟著、二〇〇二年)、第三卷〈遼宋金元時期〉(吳松弟著、二〇〇〇年)、第四卷〈明時期〉(曹樹基著、二〇〇〇年)、第五卷〈清時期〉(曹樹基著、二〇〇一年)。

(3) 齋藤修「伝統中国の歴史人口学——『人類の四半分の人口史』と近年の実証研究——」『社会経済史学』六八巻二号、二〇〇二年。

(4) 李伯重「墮胎、避妊与絶育——宋元明清時期江浙地区の節育方法及其運用与伝播——」李中清・郭松義・定宜庄『婚姻家庭与人口行為』北京、北京大学出版社、二〇〇〇年、所収。

(5) 上田信「明清期・浙東における生活循環」『社会経済史学』五四巻二号、一九八八年。

(6) 飯島渉氏は国民政府による衛生の「制度化」は都市や一部の農村部に限定されたものであったとしている(飯島渉「ベストと近代中国——衛生の「制度化」と社会変容——」研文出版、二〇〇〇年、三六九頁)。

(7) R・クロイツァー(難波恒雄ら訳)『近代中国における伝統医学——なぜ中国で伝統医学が生き残ったか——』創元社、一九九四年、一七二頁。

(二〇〇一年一月、復旦大学出版社、上海、六五八頁)